

兵庫県東播磨地方の水生植物追記 (1)

角野 康郎

(神戸大学教養部)

東播磨地方のため池の水生植物について、別に報告(植物地理・分類研究 32, 1984)したが、その後の調査で判明した事実がいくつかある。それらを順次報告してゆきたいと考えている。今回は、新たに確認された種類を報告する。

1. ヒシモドキ

加古川市A池にて 1984年9月7日に確認。水面にはヒシ、ガガブタが優占し、水中にはセキショウモ、クロモ、オオトリゲモ、シャジクモsp.などが生育する大きな池だが池岸のヒメガマ群落の間に広がるヒシモドキに気づいた。多数の閉鎖花とその結実を認めることができた。『兵庫県植物目録』(1971)には「〔東播〕各地」とあるが、私はこの池でしか見ていない。A池での生育環境に似た場所は、当地ではごくありふれたものなので、私が今まで見落していた可能性が十分にある。ついであるが、昨年は西播磨竜野市のため池でも、ヒシモドキの立派な群落にお目にかかることができた。

2. コウホネ

8月22日、神戸市西区岩岡町のため池で、全面に広がるコウホネを確認した。岩岡中学碓井信久先生の御教示による。それまで、公園の池などで栽培されている例は知っていたが、ため池では見たことがなかった。神戸市北区のため池にもコウホネがあるという情報を得ているが未確認である。当地方の池には「ヒメコウホネ」が断然に多い(この同定に問題が残っていることは先の報告でふれた)。

3. フサタヌキモ

加古川市B池にて7月10日に確認。広い面積にびっしりと広がっており、捕虫のうをほとんどつけていないので、はじめはフサモか何かの群落ではなかろうかと思うほどであった。手にとってはじめてフサタヌキモと確認できた(図1-A)。多数の閉鎖花をつけていた。生態を

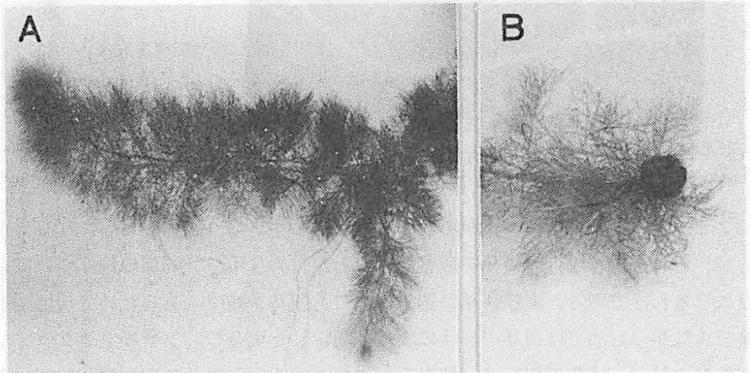


図1 フサタヌキモ (A) とその殖芽 (B)

知りたいと思いその後何度か足を運んだ。8月に入ると閉鎖花はごくわずかになった。12月には多数の殖芽を頂端に形成して越冬の体制に入っていた(図1-B)。当地方では、明石市において1936年の採集記録があるので(Komiya & Shibata, 1980による)、2番目の産地になる。

4. オグラノフサモ

オグラノフサモは、フサモ同様、冬が近づくと頂端あるいは葉腋に殖芽を形成する。フサモの殖芽は長さがつう3cmくらいまでで、基部ほど細くなる(先端近くがいちばん太い)のに対し、オグラノフサモの殖芽は長さ3~8cmで細長い棒状(円柱状)である(図2参照)。殖芽の形状そのものにも変異が存在するので、中間的な特徴をもつものを1個だけ見せられ、いずれかと問われると判断に苦しむこともあろうが、時期さえ適当であれば数多くの殖芽を観察することができ、それが「フサモ型」か「オグラノフサモ型」かは比較的容易に判定できる。

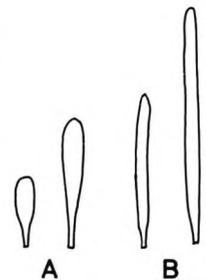


図2 フサモの殖芽(A)とオグラノフサモの殖芽(B)〔概念図〕

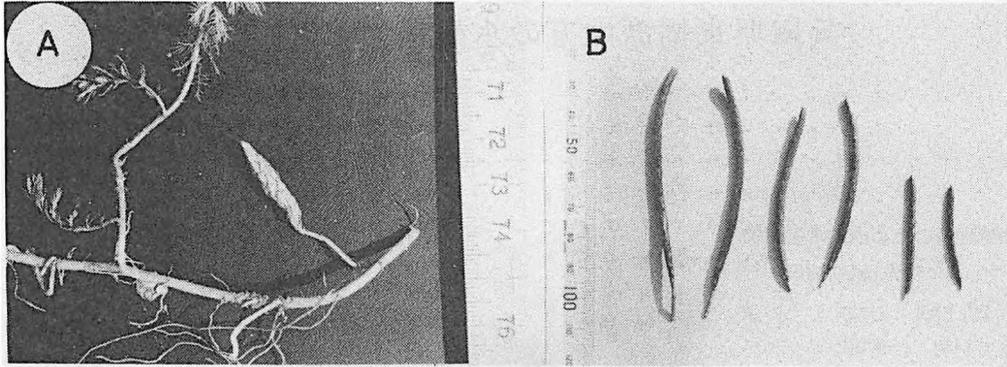


図3 オグラノフサモの殖芽。A、地面に形成されていたもの B、水中で形成された通常の形

フサモ属の同定には花や実があれば有力な決め手になるが、それを欠く場合、殖芽を観察することが有力な手段になるわけである。実際、私の調査の中でも開花を観察できなかった池では殖芽の形状によって同定した場合が少なくない。殖芽の観察は、秋おそくになってその池を再び訪れるか、あるいは植物体を持ち帰り冬まで栽培するという方法によった。

ところで、現地を観察した殖芽に図3-Aのような形をしたものがあつた。これは秋になって水の抜かれた池で、地面に形成されていたものである。私は、これをそのサイズ(1~3cm)から「フサモ」と同定して報告した。ところが昨年、同じ場所で水中で“正常に”形成された殖芽を見ることができた。それは図3-Bに示したようにまさにオグラノフサモの殖芽だったのである。オグラノフサモの殖芽も水の無い所で形成されると短かく

太った形になることがわかつた訳で、今までに観察した同様の例についても再検討する必要が生じた。そこで、あらためて現地調査及び標本の検討を行なつたところ、フサモをオグラノフサモと訂正すべき場所が他にもあることが判明した。現在、詳しい比較を進めつつあるので、いずれその結果を報告して責任ある訂正を行ないたいと考えているが、とりあえず、東播磨地方のため池のフローラにオグラノフサモを加えておきたい。

なお、最近、大滝末男氏(水草研究会報No.17)はオグラノフサモの分布地として群馬、茨城、滋賀、大阪の4県だけをあげておられるが、私自身の予備的検討では、基準産地の京都府はじめ東北以南の10以上の府県における分布が確かめられた。おそらく、本州、四国、九州に広く分布するものと思われ、今まで「フサモ」と同定されていた産地を含め、再検討する必要があると考えている。

○ 碓井信久著『神戸の水生植物』(神戸市立教育研究所発行、1985年2月、A5版114頁、頒価1300円)

神戸市内の学校の先生方が、地域の自然を理科教材に取り入れようと市立教育研究所に集まり熱心に研究を続けておられる。その成果をまとめた『神戸の自然』シリーズの14冊目として、水草が取り上げられた。

神戸市とその周辺には2万個をこえるため池があるが、この本では当地域に見られる約80種の水草をカラー写真を中心にして紹介している。生物学出身でない理科教師や一般市民にも親しみやすいものにするため、内容は努めて平易なものになっている。それだけに水草をよく知っている方にとっては、もの足りないものになっているかもしれない。しかし、200枚をこえるカラー写真を集め、

身の回りにこれだけの水草があるということを啓発するねらいは成功していると言えよう。これをひとつの出発点にして、各種類の生態観察や教材化の検討が進められてゆくことを期待したい。(角野康郎)

※この本は一般の書店では扱われません。御希望の方は、当会で取り次ぎますので送料200円を加えて、「振替口座 神戸7-13829 水草研究会」へ御申し込み下さい。なお、当シリーズの出版物は比較的短期間で品切れになり、再版されないのが通例となっていますので、早い目にお申し込み下さい。